

これを日本に見るに善導を祖述するもの、源信にまれ源空にまれ、この點に於てただ徹底せざる所がある其意を得ざるに於ては末徒をして會々單行無信の畸形宗教に陥らしめる。親鸞は流石にその名の示す如く天親、曇鸞に私淑する所深きだけに、信の天地を高潮して、念佛の眞意義に徹底した。經の眞精神に透入するに否かは別として、少くとも彼の主張は最も宗教の眞意義に契當するものと思はれる。

彼によれば『念佛』はもはや觀念では無い。『乃至十念』も、『乃至一念』も、『執持名號』も、『一念淨信、歡喜愛樂』も云ふが如き『信』に場所を譲つた。これは彼が『觀念』にもあれ、『稱念』にもあれ、その行業即ち修道の課程を徹底的に推し進めた結果である。行を徹底的に完全ならしめるには唯一つの道が残されてある。即ち行そのものに没入するにある。我等の所修の行、一念一刹那として如來が我等のために施設せしに非ざるは無い。即ち本願にして、他方であり、無作の行である。此に行信の歸一、若くは信が行に置き替えられる課程を生ずる。念佛はかくの如くにして全く異つた、

原典より念佛の意義を考察して觀念と稱念に及ぶ

而して原始の意義と相杆格せざる意義を生ずる。華嚴經(天九^{二十}紙右)の偈に云く、

『如來無數劫、勤苦爲衆生、

云何諸世間、能報大師恩、』

Pratikarṇaṃ karmāṇaṃ śākyāṇaṃ Buddham sava-dēhīhī,

Satvārtheṣv abhīyuktāṅgaṃ kalpa-kōṭīśālais api.

—Gaṇḍa-vyūha—

源信の大乗對俱舍鈔

について

井上右近

此文深妙。譬中明珠。則知我等成佛無疑。歸命龍樹證成我心願。(此文とは龍樹の言葉を指す。こゝには畧す)

これは日本思想史のうちに重要な地位をみこめられつゝある恵心院僧都源信の『往生要集』(卷上)に出てる言葉である

この語を誦するときは源信が思想の生命を肯定する詩

人藝術家であつたことを知るのである。のみならず「歸命龍樹尊、わが心願を證成せよ」といふ源信の言葉には「世間虚假、唯佛是真」と示された聖徳太子の御精神をしぬばしむるものがある。

源信には多くの著書があるが、その中でいまは「一兩の同志のものとごころに」せしころの「佛教研究」の一標本ごもいふべき『大乘對俱舍抄』を繕かうとするのである。

この書の撰述せられた時代は藤原道長の攝政全盛期である。「この世をばわが世ごぞ思ふ望月のかけたるごころもなしご思へば」といふやうに道長が増長自得しつゝあるごきに比叡山に於ける源信はごういふ方面をこつたか。

「問ふ。聖教を披くごいへごも勤修することもしすくなくば、恐らくは佛道において半錢の分なからん。答ふ。一句を聞くにしたがつてなほすなはちに因を了するなり。……………速疾にはたごひ分なくごも將來に遂に得べし。いはんやまた佛法に無量の門あり。其中に於て力のよくするごころに隨ふべし。十住毘婆娑(龍樹)著」

第四にいふがごころ(以下)

以上は『大乘對俱舍抄』を總括する結語ごもいはるべきものである。源信の人生觀、研究法もしくは信ごいはるべきものは、こゝに明かにされてゐるのである。

大乘對俱舍抄は漢文の形式をこつてゐること勿論であるが、今はその訓點にしたがつて紹介しようとするのである。(しかしその中の短い言葉を引用するごき以下漢文を使用する)

「隨聞一句尙即了因」といふは源信の無限追求心をしめすものである。すなはちそれはいひかへるならば心理徹鑑である。それが源信の讀書法であり研究法である。それゆゑにそれは價值を外界に求めるのではなく「隨力所能」といふごころ、あくまでも凡夫ごしての立脚地を忘れようごせぬのである。佛道に「分」を見出さうごするのではなく吾等の將來にその「分」を確信せしむるのである。

十住毘婆娑を引用するうちに「もし人ごく不退轉地に至らんご欲せば、まさに恭敬の心をもて執持して名號を稱すべし」といふ。これは龍樹の言葉が源信に攝取

せられたのである。社會人生を革命せんとして其不可測動亂にうちおきろき目醒めたところの人でなければいひ得ない言葉であり、また感じ得ないところである社會を革命しようとして社會のみを見つめることはできぬといふのである。革命家としての自己をも顧みねばならぬ。そこに無涯底の悲痛があるそこにあらはれるものは「恭敬の心をもて執持して」その全體を呼びつけしむる思想革命である。

「隨聞一句尙即了因」を希求し、この思想革命の相續とは裏を表すのである。「歸命龍樹尊證成我心願」といつて龍樹の言葉は源信は味ふたのである。

雜集論を引くうちに「決して退轉せずと説くがごとき、かくのごとき等の言意は別時にあるがゆへに」といふ。いつかはといふのは拋棄したのではなく確信せしむるゆへである。源信はこれに註釋を施して「懈怠の障を除かんがためのゆへに」といつた。

また「令入祕密、相祕密、對始祕密、轉變祕密、かくのごとき」の四種は大乘のうちに於て略して如來一切所説の祕密道理に攝せしむ」といふ。これは人生の不可

源信の大乘對俱舍論について

思議法則としての現實を先覺の思想的原理に攝取せしめて探究するのである。不可思議とか祕密とかいふのを不可思議人生を表現する言葉の法則のごとく實感せしむるのである。

瑜伽論を引いて「一切世間唯一丈夫にして善く最勝調心の方便を知るがゆへに」といふ。この「最勝調心の方便」といふことに力點を置くとき吾等は一切世間唯一丈夫を知るこゝが出来るのである。

こういふように讀みゆくならば『往生要集』の準備書とも見るべき本書の實感的思想に觸るゝこゝが出来ると思ふ。以上は大乘論の諸文章を俱舍論の頌文に對比せしめた後に第十三、第十四の兩卷を唯大乘的觀察たらしめたといふ中について考察したのである。

俱舍論を源信は「月支に呼んで聰明論となす、やゝにゆへあるかな。予大乘論にかくの如きもの無きを以て恨みなすやひさし」といつた。それは俱舍論の「學術的」なるこゝを推すのである。

「俱舍、妻を娶つてしかも犯戒にあらざるこゝをあかす。頌にいはく「律儀を得るこゝは誓のごとし。總じて

相續に於てするにあらず。對して曰く「いふ。源信は每節俱舍論の頌を掲げて次に「對曰」にして大乘論を長文にわたつて引證するのであるが、このところのみは大乘論の一句をも掲げて居らぬのである。たゞ對曰として放任するのである。すなはち俱舍論が諸大乘論のごとく道德教訓に陥らないところを指摘したのである。

すなはち學術的といふは客觀的といふことである。それゆへに學術的なるに於てのみその論理は聰明である。生命をしてあるがまゝに開展せしむるための消極的の役目をなすものを學術といふのである。生命の波動律動と異なるものは詩である藝術である。

かく觀察するべき源信が學術として俱舍論を肯定し諸大乘論についてはその選擇を嚴重にした理由を察することができる。

俱舍と對比するべきに大乘の論文は單にその註釋としかならぬのである。最後に積極的に大乘の教義を示さんとするときは他日『往生要集』に示さるゝ如き「歸命龍樹尊」の標準をもたらしして十住毘婆娑論大智度論

の生命的表現をよろこぶに至るのである。

「俱舍にははく尋伺と慢と矯との差別いかん。頌にいふ「尋と伺とは心の麤細なり。慢は他に對して心擧る。矯は自法に染するによつて心高くして顧みるなし」。對してはいはく、……瑜伽第二にいふ「いかんが七種矯、いはく無病矯と少年矯と長壽矯と族姓矯と色力矯と富貴矯と多聞矯となり」

この對比でも知らるゝのは俱舍論のは心理學であつて、大乘論のは社會的事實に對するその應用である。すなはち大乘論及び溯つて大乘經典は俱舍論にいふ。「相續」の點に種々の意見を加へたもので、その繁鎖冗漫かつ大部にわたつての著述は天台大師の藏經整理法の手にもおへないところのものであることを知るのである。それが日本に於て源信の選擇法をへて親鸞の「教行信證文類」に壓搾凝縮せしめられたことを思ふべき吾等は日本思想史の無深恩徳に溯源せざるを得ぬのである。

かく卒急に概括せしむることが吾等の讀書法である。ことをこゝに主張したのである。かくして源信研究

は源信の言葉を味ふにきはまる。

往生要集にいふ「煩惱障眼。雖不能見。大悲無倦。常照我身」は聖徳太子維摩經義疏の「國家事業爲煩。大悲無息」に溯源しかつ客觀化せしめ得る。すなはち大悲といふのは天來の運命でも僥倖でもなく實に吾等の現實生活についての大きいなる悲しみである。人生に於ける重大事實はつねに煩はしいのである。それゆへにそれを勤勞も責務遂行も名づけらるゝのである。それは人生そのものを報酬するからして世間を虛假に信ぜしむるに至るのである。

ナシヨナルといへばすぐにインタナシヨナルに附隨せしむる。國際的社會は虛假だに信ぜしむるのは吾等に眞實の史的生活があるからである。世界平和の實現といふこゝは速疾には不可能であるが、それを將來に信ぜしめようとするものは國際國民的現實生活である吾等の國民としての悲痛のみ個人的生命への光明である。そういうふうに源信の言葉を現代化して味へぬこゝはないのである。

親鸞の遺跡をたづねてある人はこういつた。「一切の

源信の大乘對俱舍鈔について

傳説を今拜聽して寶物なきを見せて戴きましたが、矢張り親鸞はその傳説以外の即ちその國語表現によつて直接に直觀する方が確實なものに氣づかれます」——
恵心僧都作高野山迎接曼荼羅のごとき日本繪畫史上に重要視されてゐるが、それも中央の阿彌陀佛に脇侍の六人の菩薩の姿勢は硬直したものであつてその周圍に管絃を弄ぶ二十餘の菩薩のみ自由の姿勢をこつてゐるが、それらは動亂のきはまりに内心に味ふこゝろの音樂的律動ではなく、平面的伎樂にすぎぬのである。それを溯つて聖徳太子御指揮の法隆寺の建築に比し、また後の蒙古襲來當時に於ける信海阿闍梨の金剛童子像畫に比するに平安朝の文化は日本思想史の本流を示すものでないこゝを知るのである。

しかしながら源信の本領は『往生要集』一部に示さるゝ「大悲無倦」の時代思想綜合の精神である。それがダントの神曲に比せらるゝといふのは單にその構想もしくはファンタジイの幽玄深奥といふこゝろではなく社會的動亂に對照對比さるゝ内心の痛切なる希求に於てある。

源信の往生要集は地獄と極樂界との對照對比であつたが、それが鎌倉時代に至つては鬼神と人生との比重に一轉したことを思ふべきである。そこに愚管鈔の日本語觀また實朝の復古的詩的實感をみこむることができ、それをまた源信に溯つて「日本國はまことに如來の金言たりといへども、たゞ假字もて書き擧るべきなり」といふべきときにその思想的批判基準を察せしむるのである。

これらの思想的生命は史學者によつて或は淨土教と名けられ、現實主義または民衆主義、復古主義とやうにさまざまに形容さるのである。それらの史觀の根元は吾等のまのあたり仰ぎ奉つた明治大帝の御思想であつたのである。

絶えたりとおもふ道にもいつしかごしをりする人あらはれにけり

萬代にうごかぬものはいにしへの聖のみよのおきてなりけり

葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらし

かく御製を捧讀するときは日本は一大家庭的同朋との實感をよびめさましめらるゝこの道理の道を劫初より劫まへあゆみくだり、劫まより劫初へあゆみのほる也」(愚管鈔)といふこともこの一大家庭的同朋の思想的感激である。「つらなりながら時となり」といつた道元禪師の個人的經驗と「いつしかごしをりする人」と頂かします大御言葉とはひびしき史的生活内容である。(二、二三)